

第3回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和4年9月29日（木）10時～15時 参加者：52名（うち市町村等から31名）
会場：秋田県生涯学習センター講堂

今年度3回目となる本研修では、「キャッチできる体制をつくり、持続可能な家庭教育支援の在り方を考えよう」というテーマのもとに、学校・保護者・地域が一体となって支援に当たっている事例やコロナ禍におけるインターネットなどを活用した支援の工夫について学びました。

【午前の部 講話・協議】

福島県西会津町家庭教育コーディネーター（兼）教育相談員である**紫藤 真理子**氏より、「西会津町地域学校協働本部事業家庭教育相談室『こころのオアシス』の活動」と題し、お話しいただきました。はじめに、人口の減少による子どもたちの環境の変化に対応する西会津町の取組の一つとして、家庭教育支援のための相談室「こころのオアシス」が棟続きの小学校と中学校の校舎の中央部分に設置されたことを説明されました。続いて、「家庭の笑顔大切にしたい」という考えのもと、家庭の孤立化を防ぎ、家庭の教育力の向上を目指し活動してきたことを述べられました。「こころのオアシス」は、保護者の相談に対応するとともに、児童・生徒が気軽に来室できる相談スペース及びキッズスペースがあること、学校の中にあるにもかかわらず学校の中を通らず直接外から出入りできることなど、安心して話ができる様々な「おもてなし」の工夫がなされていることを紹介されました。このような取組を続けることで来室者数は年々増加していることや、子育てや夫婦関係だけでなく家庭のさまざまな相談内容を「じっくり聞いてしっかりつなげる」ことを心掛けて、対応していく中で問題解決につながった事例も数多く紹介されました。参加者は、障害のある子や不登校傾向の子が休み時間に相談室を訪れて話をしたり、相談員と学級担任が相談室で気兼ねなく情報交換を行ったりしていることを知り、学校の中にある「こころのオアシス」の有効性に感心したようでした。このように、子どもや保護者・教員にとっての「第三の場所」の大切さや、傾聴による信頼関係の構築の大切さについて、大きな示唆を与えていただきました。



【午後の部 講話Ⅰ】

横手市家庭教育支援チーム「どんぐりすのもり」の代表**佐々木 広恵**氏・副代表**柳沼 香子**氏より、「コロナ禍でも気軽に相談できる工夫」と題してお話しいただきました。冒頭、佐々木氏は、「子どもの笑顔を守るには家族の笑顔を守ること」という活動理念について説明されました。また、コロナ禍によって企画していた講座やイベントが中止になり、SNSによって保護者とつながってきたことも述べられ、保護者のストレスの増加を感じることも多くなり、コロナ禍だからこそその支援としてZOOMを活用したオンライン講座を企画するようになったことを説明されました。現在では、対面でもオンラインでもできるハイブリッド型の講座へと工夫を進めているそうです。柳沼氏からは、親子や家族の会話のきっかけとなる「個性心理学」について紹介されました。参加者はその内容から、相談や支援だけでなく自身の家族との会話のきっかけをつかむヒントも得たようでした。



【午後の部 講話Ⅱ】

秋田県生涯学習センター社会教育アドバイザーの**工藤 孝**が「学校との連携づくりについて」と題して話をしました。「家庭教育に関する国民の意識調査」の結果に基づいて、「学校と連携したキャッチする・きく・つなぐ家庭教育支援」を目指し、どのような方法や手段が考えられるのかを説明しました。学校報を活用するなど、子どもたちのために切れ目のない持続的な地域の家庭教育支援活動に努めてほしいと訴えました。

【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・こころのオアシスという心の居場所がいつも学校の中心にあって先生方の異動があっても動かずに存在することが地域の人たちには本当にオアシスになっているのだとすらやましく感じた。
- ・協議は、同じ立場や職の方々との情報交換できて、自分の町で今後実施したいことが見つかりよかった。
- ・保護者にとって「癒やしの森」となるような、子どもだけでなく親の笑顔を引き出すような活動という着眼点や活動が素晴らしいと思った。私も一保護者として参加してみたいと思った。佐々木さんと柳沼さんがユーモアを大切に笑顔でいた姿勢を見習いたいと思った。
- ・子育て支援の周知やつながりをつくるためにも学校を活用した周知方法は有効だと思いました。